

しあわせ

4 月 号



三塗苦難ながくとぢ
さんづ くなん

但有自然快樂音
たんにう じねん けらくおん

このゆへ安楽となづけたり
あんらく

无極尊を歸命せよ
むごくそん きみよ

（『浄土和讃』四五）

地獄・餓鬼・畜生という苦しみは名すらなく、ただ自然の音楽のみ響いている。だから浄土は安楽国と名づけられる。極まりなく尊い如来を仰ぎなさい。

（意訳）

「手を合わせる母」

四月からは新年度。昨年度は新型コロナに終始した一年だったが、いよいよワクチン接種も始まり、オリンピックに向けて明るい話題も多くなるに違いない。

四月八日は花まつり。人類は、お釈迦様の出現によって「命の尊さ」を知った。

「天上天下唯我独尊」お釈迦様が、お誕生になると七歩歩かれて右手は天を、左手は地を差して発せられた言葉だと伝えられている。命の尊厳に目覚めよとのおさとしてある。

我が命を大切に思うのは、生きとし生けるもの皆すべてだが、わが命を「尊い」と拝めている人は少ない。

自分の命を拝めないものに他者の命を拝む心はない。「人の命は尊い」とは、よく耳にする言葉であるが、なぜ？と問われて答えられるものは少ない。「人身受け難し、今すでに受く」この一言が言える身になってこそ、人間に生まれた所詮がある。

法座案内

春季永代経法要

四月 九日（金） 昼席・夜席
十日（土） 昼席

講師 安方哲爾師
（大阪府 妙満寺住職）

法味の会ーご和讃のこころー

四月 二十三日 午前十時
お話 自坊住職

※新型コロナの影響により急遽中止となった場合は、掲示板にてお知らせいたします。

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目一五十三
栢原山 龍仙寺

電話（〇八二）二八二一四八二



自然（じねん）の音楽

三塗（さんづ）という言葉を開かれたことがあるでしょうか。火塗・刀塗・血塗（けちづ）といい、それぞれ地獄・餓鬼・畜生にあたります。地獄は瞋恚（いかり）のころによって落ちていく世界であり、火に焼かれる苦しみをうけるから火塗といえます。つぎに餓鬼は貪欲（むさぼり）によって落ちていく世界であり、たがいに喰いあう苦しみをうけるので血塗といえます。そして畜生は愚痴（おろかさ）によって落ちていく世界であり、刀で強迫されるような苦しみをうけるから刀塗といえます。これらは塗炭の苦しみというように、泥にまみれ火に焼かれるような苦しみをうけるので、三塗というそうです。しかし、阿弥陀さまの浄土は、そのような三塗の苦しみは名すらきこえず、ただ人間のはからいを超えた自然（じねん）の音楽のみが響いている世界であるから、お経には安楽国とも説かれています。

自然（じねん）とは、もとは中国の老荘思想で用いられていた言葉でしたが、お経をインドの言葉から漢文に翻訳するにあたって、おさどりの境地をあらわすために用いられるようになりました。無為自然（むいじねん）ともいわれ、人間のはからいをこえた、ものの自ずからなるありさまを表すことばです。西洋では、ものや環境を人の手によって耕し開発するところに価値をみる傾向が強いですが、東洋では、逆に人の手垢のついていないありさまに価値をみる傾向があります。見事に整えられたヴェルサイユ宮殿の庭園と、東山にとけこむような銀閣寺の庭園の違いですね。無為自然（むいじねん）という言葉は、そのような人為をはなれた悟りの境地を指しています。つまり仏教では人間のはからいを虚妄とし、わたしのはからいをこえたものを真実とするのですね。「人為」という二文字を合わせると、まさしく「偽」であるように。

富士山の名所、三保の松原に伝わる天女の

羽衣のお話をご存知でしょうか。あるとき白龍（はくりょう）という漁師が釣りをしているとき、松の枝に何かがひっかかっているのを見つけます。手にとると見たこともない美しい衣で、ぜひ家宝にしよう！と持ち帰ろうとしますが、そこに一人の天女が現れます。「それは天女の羽衣です。人間が着ることはできませんから、わたしに返してください」白龍がしぶって断ると、天女は泣きながら、「わたしはその羽衣がないと天に帰れません。どうかお願いですから、返してください」と懇願します。かわいそうになった白龍は、天女の舞いを見せてくれるならばと条件を出しますが、天女は羽衣がないと舞えないので先に返してほしいといいます。仕方なく返そうとして、白龍はふとためらいます。先に羽衣を返してしまったら、舞わずに天に帰ってしまうのでは…と。すると天女は言いました。

「げに偽りは人にあり

天には偽りなきものを…」

偽りは人にこそあり、天に偽りはない…。その一言に白龍はみずからを恥じ、天女に羽衣を返しました。すると天女は美しく舞いながら、ゆっくり雲の中へ消えていったそうです。

白龍はなぜ、天女を疑ったのでしょうか。それは自分が偽りをいう、人間だったからです。自分が偽りをいう、だからわたしたちは人を疑います。しかし白龍は最後の天女のことばに、自らを恥じました。疑うことなく。

白龍はその一言を人の言葉ではなく、天の声として聞いたのでしょうか。私たちは人間のはからいをこえて、この身のすべてを包むものに出遇って、はじめてわが身を知るのですね。

お念仏もおなじです。お念仏はそこから聞こえます。それはこの一声一声が、浄土から流れる自然の音楽であり、この身のすべてを見通された如来の喚び声だからなのです。